沖縄大自治会再建へ！

全学連（斎藤郁真委員長） 書記局通信

2014年５月26日
No.196

Tel　03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

沖縄大で全学シール投票が進む！

※５月19日の沖大キャンパス集会（№195で既報）を受けて、沖大自治会復活会の呼びかけで、自治会再建に向かっての全学シール投票が呼びかけられています（「自治会復活会」ブログ参照）。同ブログより転載します。

キャンパス内で専用ボードへのシール投票を呼びかけています！

沖縄大学学生自治会再建にむけた経緯と目指すもの（案）

2014年５月22日　沖縄大学学生自治会復活会

【1】学生自治会再建に至る経緯

（1）

高額の学費、迫られる奨学金の返済、アルバイトや就活に追われる毎日。４人に１人の学生が卒業までに大学を去っていく現実。「このクラスの６割が非正規職になる。だから頑張れ」（キャリアデザインの講義）、「（最低賃金以下で雇われても）解雇されるかもしれないから、声を上げないほうがいい」（労働法の講義）――現状を追認し、私たち学生の可能性と未来を奪う授業。オスプレイを礼賛し、基地の固定化を狙う在沖米総領事・マグルビーを大学に招き入れての講演会。これらの現実を目の当たりにする中で、私たちは「この大学を変えなくてはならない」という思いを強烈に感じるようになりました。

（2）

2011年に起こった福島第一原発事故は、国策に追随する大学の姿と「御用学者」の存在を世に知らしめました。この現実は、学生自治会をはじめ、大学と闘う組織と団結が解体されつくした末に行き着いたものでした。

しかし、全国の学生はこの現状には黙っていませんでした。この現状に対して11年６月には京都大で、12年７月には広島大で学生自治会が再建されました。東北大学では10年以上前に大学によって学生自治会が非公認化されながらも、学生自治と団結守り抜いてきました。また法政大学や福島大学などで学生自治会を再建する動きがはじまっています。

正門で訴える復活会代表・赤嶺知晃君（法経２年）

全国の学生の闘いを目の当たりにする中で、私たちは学生自治会の重要性と必要性を痛感するようになりました。

（3）

2014年は、沖縄と日本・アジア・世界の進路が大きく問われる年になろうとしています。

現在安倍政権は、集団的自衛権行使容認や国民投票法の改定など「戦争のできる国」をつくりあげようとしています。そしてその大きな柱に「大学改革」を位置づけています。

また４月に行われた日米首脳会談、11月に予定されている沖縄県知事選を通して、安倍政権はアメリカと一体となって辺野古新基地建設を推し進めようとしています。

そして沖縄大学は昨年12月、学生に一切告知することなく学則を変更し、「ビラまきの全面禁止」を決定しました。

さらに今年に入って、学則に記載されていない理由をも使って、施設使用を不許可にする事態が発生しています。

大学の現状に対する強い憤り、さらには2014年が歴史的な年になろうとしていることを見据え、私たちは、沖縄大学のみならず、大学と学生、沖縄と日本の未来をかけて、ここに学生自治会を再建することを決意しました。

【2】沖縄大学学生自治会の目指すもの

一、辺野古新基地建設反対の声をあげよう。学生として戦争に反対しよう。戦争と基地をなくす力は学生の団結と行動にあります。

一、ビラまき禁止の学則を撤廃させよう。ポスターの検閲、教室や広場の使用規制など、学生を無視したあらゆる学内規制の強化に反対します。大学の主人公は学生です。

一、４人に１人が辞めざるを得ない大学の現実を変えよう。学費減額、奨学金の拡充、駐車場拡充・無料化、学食設置など、学生の生活を守り、要求を実現するために団結して行動します。　（了）

弾圧教職員を弾劾する赤嶺君とキャンパス中央に集まる沖大生（19日）

全国学生からの沖縄闘争の感想①

■東北大学３年生

集団的自衛権問題や日本国憲法９条の解釈問題という形で、日本にも戦争の危機が迫る中で沖縄に行きました。沖縄は第二次世界大戦の末期に日本領土内で住民をも巻き込んだ大規模な地上戦が行われた地です。５月17日にはひめゆり記念館に行き、沖縄地上戦で犠牲になったひめゆり隊の戦場での様子やその最後について改めて勉強しました。見学途中、ひめゆり隊の戦場での現実におぞましさを感じていた人はいましたし、自分もひめゆり隊の現実は悲惨そのものだと思いました。今の女子中学生や女子高校生が銃弾や砲弾が飛び交い、空爆や艦砲射撃などがなされる中に置かれ、その挙句に、解散命令の名の下で戦場に放置され死んでいった。このことは悲劇そのものだと思いましたし、同時にこの悲劇でさえも戦争全体の悲劇の中のほんの一部に過ぎないというのも事実です。ひめゆり記念館に行き、解釈改憲反対と戦争から対極の沖縄実現を改めて思いました。

戦争反対と基地撤去を掲げて、今沖縄大学では自治会復活会の学生が自治会復活の選挙をしています。戦争反対や基地撤去などの主張を沖縄大学の学生に問うているだけなのに大学側はその学生の自主的活動を弾圧しています。沖縄大学はリベラルな大学だと言われていたのに、です。ここに「体制内左翼」だとか「リベラル」と言われている人々の矛盾があると思います。「リベラル」教授達は口では現状の社会への批判的態度を示していますが、それは学生や市民、労働者たちは無知で無批判的で行動しないという前提の上に批判的態度を取っているに過ぎず、そうすることで自分達のアイデンティティや小利口さを示しているだけだからです。

さらに社会を批判しているくせに自分達もまた社会の構造や思想に漬かっている自覚さえおそらく持っていないのが「リベラル」教授達の姿だと思います。口では自由や批判を言いながら、自らの小利口さや行動前提が消えるのを怖れて学生の自由を弾圧する「リベラル」教授の在り方は許せないものですし、醜さそのものだと思います。今回の沖縄旅行では、真に沖縄学生の自由や権利を守る学生自治会の復活が必要だとも強く思いました。

■広島大学１年生・佐渡候貴（さどたかあき）

広大自治会の新入りとして今回、沖縄闘争に参加しました。修学旅行で一度沖縄に行ったことがありますが、今回のような形で再びあの地に行くことがあろうとは夢にも思っていませんでした。こういう状況を「一寸先は闇」と形容できるのでしょうか。

自分が参加したのは二日間だけですが、その二日間は非常に濃い内容であり、修学旅行では到底体験できないと思います。ひめゆり記念館の見学、デモの参加、基地観察など、非常に印象深い闘争でした。修学旅行では自分にとって未知なる文化圏に触れ、本土との違いを感じましたが、今回は基地が身近にあるという状況を認識し、本土との違いを感じました。確かに本土にも基地がありますが、土地に対する基地面積が大分異なります。

今振り返ってみれば、新たな視点で本土と沖縄の違いを再認識した闘争だったと自分は思いました。

【当面する行動方針】

●国鉄闘争全国運動6･8全国集会

国鉄1047名解雇撤回・外注化粉砕！

６月８日（日）13時～ 東京・文京シビックホールにて

【呼びかけ】国鉄分割･民営化に反対し、1047名解雇撤回闘争を支援する全国運動

●6･13法大処分撤回第6回裁判

６月13日（金）16時～ 東京地裁･615号法廷にて　※傍聴券配布のため30分前までに裁判所脇に集まって下さい